

# 1.はじめに



## 1. はじめに

口腔疾患や口腔機能の障害が全身的な健康状態に影響を及ぼしていることは、これまでもたびたび指摘され研究論文が発表されている。日本歯科医学会では平成2年から3年の2年間に亘り、「咬合と全身」の関係について既に文献調査を行っている。具体的には関係7学会（歯科基礎医学会、歯周病学会、口腔外科学会、歯科保存学会、小児歯科学会、補綴歯科学会、矯正歯科学会）より代表委員を集め、委員会を組織して国内外の文献調査を行った。その成果は、日本歯科医学会雑誌(1)に収載されている。「咬合と全身」の関係についての文献は、脳神経系との関連、全身発育との関連、姿勢・頭位・筋平衡との関連、人類学的・進化論的な関連、全身の骨組織との関連、発音・聴覚・視覚・味覚との関連、スポーツ・運動との関連、心理・精神発達との関連、疼痛・全身疾患との関連、一般向け啓蒙書・成書類、歯科領域のみにおける咬合・顎運動・顎関節との関連の11領域に分類されている。

しかし、当時はPubMedによる検索など、今日では日常的に用いるインターネット技術が使えない時代であり、文献を収集するだけに忙殺されたためか、内容の分析までには至っていない。また、生命の質、あるいは生活の質と訳されるQuality of Life (QOL) の概念がなく、今日的な視点で再検索・再分類が求められる内容であった。

これに対して本報告書では、QOLに加えて、心疾患などの特定疾患にテーマを絞り、コンピュータによる系統的な検索の手法を用いて分析を行っているので、日本歯科医学会のかつての報告書とはまったく違ったものになっている。

これまでの保健医療福祉は「生命の量」を増大させるものであったが、これからの高齢社会は「生命の質」の向上を伴う時代になっている。歯科医療に対する国民のニーズも変化し、子どもから高齢者まですべての世代の摂食と言語・コミュニケーションの中心的な機能を担う口腔をどのようにして育成・維持・回復させ、QOLを維持していくかが新たな課題になっている。高齢社会における人間の健康とは、世界保健機関(WHO)の健康の定義で述べられているような「完全な健康状態」を追い求めるものではない。ありもしない健康への幻想を追うことなく「所属するコミュニティへの適合能力」によって人間の健康状態を計測すべきである。食べる、しゃべる、笑う機能を担う口腔は人間のコミュニティへの適合能力に大きく関わっている。もちろん摂食と言語・コミュニケーションの育成・維持・回復は齶蝕や歯周病の予防・治療という歯科の専門的保健医療だけではなく、健全な脳機能によって統合される必要がある。高齢社会では脳血管疾患による脳機能の異常で誤嚥や言語障害が増加しており、今後の歯科医療は総合的な医療チームの中で病診連携の適切な対応をすることも求められている。

本報告書では、「2型糖尿病患者では、身体機能と身体の日常役割機能において、現在歯数が20本以上の者で良好であった論文がある」「インプラント義歯と総義歯の生活の質への影響の違いを示した論文がある」「顎関節症患者、義歯患者、歯周病患者の順で社会機能が低下している論文がある」など口腔保健とQOLの関係について具体的な事例が示されているので、今後の日本の医療政策全体に役立つものと思われる。

一方、感染症の研究の進歩とそれに伴う概念の拡大により、従来知られていた急性感染症だけでなく慢性感染症や持続感染症という新しい概念が確立してきた。いくつかの生活習慣病が感染症に再分類され始めた。口腔には腸内に匹敵する種類の細菌が検出されており、これらの細菌の一部は持続感染している歯周病巣から循環器へ、誤嚥によって呼吸器に拡がることも次第に明らかになってきてい

る。歯周病菌とは、歯面でバイオフィルムを形成し、血漿成分である歯肉溝浸出液中でも増殖できる特定のグラム陰性細菌のことである。グラム陰性細菌なので、内毒素 LPS を共通に持ち、生体細胞からサイトカインなどを産生させ歯槽骨の破骨細胞を活性化させるだけでなく、様々な全身的な疾患を引き起こす。歯周病菌は、歯周病を引き起こすだけでなく様々な全身疾患と関わっている。

歯周病菌と全身疾患の関わりについても、本報告書では「歯周病は、将来起こる心疾患のリスクを、歯周病の無い人と比べて約 19%増加させるという論文がある」「歯周病があると 1.15 倍心疾患になりやすいという論文がある」というように具体的な例をあげ、数値を示しているので、これからの施策に役立てることができる。

以上述べたように、平成 4 年に発表された日本歯科医学会の調査報告とは質的に異なる優れた結果が本報告書には記載されている。高齢社会を迎えてますます多様化する国民ニーズに応えるために、一人でも多くの専門家が本報告書を読むことを期待したい。

## 参考文献

1. 福原達郎 咬合と全身の機能に関する調査研究日本歯科医学会雑誌11巻129-178頁、1992年（平成4年）

花田信弘

## 2. 文献調査（システマティックレビュー）の 目的および意義



## 2. 文献調査（システマティックレビュー）の目的および意義

今回の文献調査では、従来までの文献調査とは違って、より厳密な再現性のある科学的な手順に従って行われた。また、利用する時の参考になるように、研究方法によって論文の質を評価した。

### 本研究での文献調査と従来までの文献調査との違い

#### 従来までの文献調査：

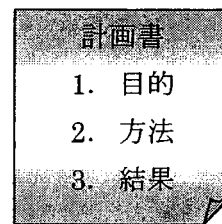
いろいろな研究者が、個人的に集めた文献を、各自の考えに基づいて整理したもの。研究者の考えが、文献調査の過程に影響するため、結果が研究者の考えに従って歪められる傾向がある。

#### 本研究での文献調査：

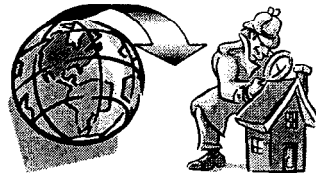
医学論文を再現性のあるルールに従って系統的に検索し、ルールに基づいた質の評価を行って整理したものであり、システマティックレビュー（Systematic review、系統的総説）と呼ばれる方法を準用した。よって、文献調査の過程に研究者の考えが反映されずに、より客観的な結果となる。また、再現性が確保されており、科学的な手順に従ったといえる。

### システマティックレビューの方法の概略

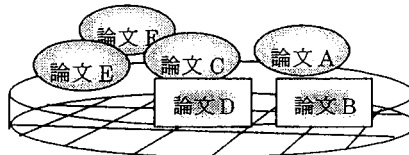
#### 1. 研究計画を立てる



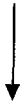
#### 2. 現在の入手可能な世界中の医学論文から、再現性のあるルールに従って、知りたい情報のみを検索



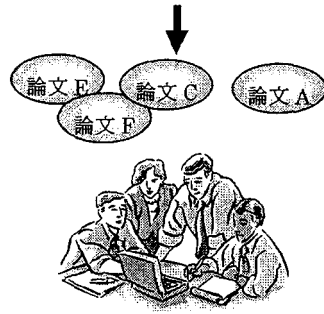
#### 3. ルールに基づいた質の評価を行って、



論文を吟味選別する



4. 客観的に記載する



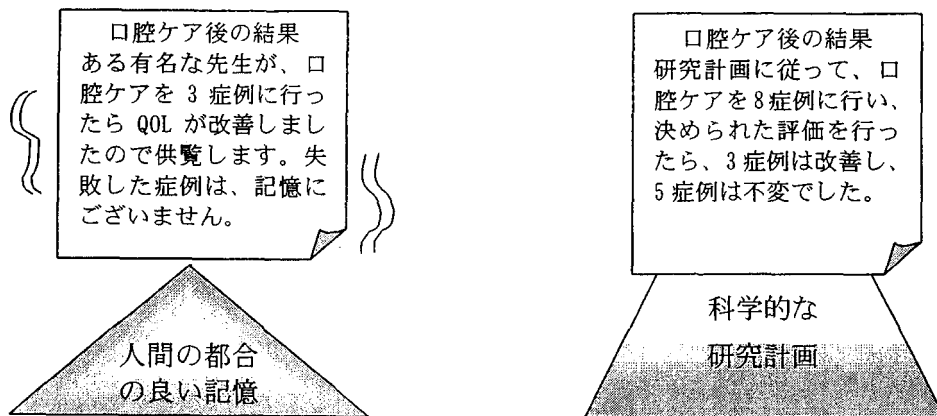
### 論文の研究方法による分類について

本研究では、研究方法を分類して、論文を利用する場合の参考とした。この基準が、絶対的なものとは言えないが、研究方法が厳密でない（数字が大きい）場合には、結果を鵜呑みにせずに、各自で検討しながら利用することが必要である。

わかりやすいように、極端な例で解説する。たとえば、以下の2つの情報があるとする。

- (1) ある有名な先生の成功した症例の結果報告の論文
- (2) 大学病院で厳密な研究計画に従って客観的に評価された研究結果の論文

あなたは、どの情報を信用するか。たとえば、(1)の情報は、失敗した症例数も明らかになっていないばかりか、その研究手順が明らかになっておらず、科学的な再現性が確保されていない。それに対して、(2)は、信頼がおける。よって、これらの研究方法による分類であるAHCPRの分類(p48参照)を併記して、結果を利用する場合の参考とした。また、数字が大きくて研究方法が厳密でないとされた論文の中にも、有用なデータがある場合もあるので、数字の大きな論文も記載した。



湯浅秀道



### 3. レビュー概要

